

# 黒豹注意報 2

～新米OLタンポポの憂鬱～

Y u k a & K a z u m a

---

京みやこ

*Miyako Kyo*

termity



エタニティ文庫

## もくじ

『恋人』が始まりました 5

付きまとう劣等感<sup>れつとうかん</sup> 153

番外編  
子守唄は花びらに乗せて 297

書き下ろし番外編  
縁結びには、ご用心! 315

『恋人』が始まりました

## 前巻のおさらい

私、小向日葵ユウカ、二十一歳。苗字をもじって、会社の仲のいい人たちからは「タンプオちゃん」と呼ばれることが多い、新米OLだ。

身長は百五十三センチでちんまりとしていて、そのうえ外見も幼いから、よく高校生に間違われるものの、日々社会人として頑張っているのです。

私は短大で入社したけど、周りの先輩や同期は四大卒の人ばかり。みんな、年下の私を仕事面でもプライベートでも、とても可愛がってくれています。いい会社に入れて本当によかった！

短大で新聞部に所属していた私は、その経験を買われて、総務部広報課に配属されました。主に社内報を作っています。その中で、一番重要な仕事は社内での重役さんたちへのインタビュー。

というところで、毎月インタビューに応じてくださっている我が社の社長に会いに行きましょう。

「今回もよろしくお願ひいたします」

「おう、任せとけ。さ、ソファに座ってくれ」

爽やかな笑顔が女子社員に大人気の我が社のトップが、社長室を訪れた私を出迎えてくれた。

ある悩みを抱えていた私は、おずおずと切り出す。

「あの……社長、インタビューの前に私の悩みを聞いて下さい。竹若さんのことなんですけど……。彼のあの独占欲、なんとかありませんか？ 竹若さんは社長の秘書なんですから、上司としてビシッと行ってください」

「……なんとかかなるなら、とっくになんとかしている」

ソツと遠くを見つめる社長。私も社長と同じように遠くを見つめる。

「ですよ。色気より食い気で、しかも恋愛経験のない私を、どうして恋人にしようとしたのか、いまだにわかりませんよ。竹若さんは仕事はできるし、スタイルもいい。オマケに超絶美形なんだから、女性なんて選び放題だと思っただけです」

「まあ、まあ。一生懸命仕事をしている小向日葵君は、すごく素敵だぞ。それに、君の笑顔は無敵だ。そういうところを含めて、竹若は小向日葵君に惚れたんだろうな」

「そ、そうですね」

はにかんでいると、社長が大きく頷いた。

「小向日葵君が入社してすぐ、アイツの纏う空気が柔らかくなった。で、君が社長室を訪ねてくるたびに、やけに嬉しそうにしているな。俺はすぐにピンと来たぞ」

「え？ 私、ちっともわかりませんでした」

驚く私を見て、社長がヤレヤレと肩を竦める。

「だろうな。セクハラとスキンシップの違いもわからないぐらいだもんな」

「ちよつと行き過ぎじゃないか、くらいには思っていましたけど」

「『ちよつと』だと!? 小向日葵君、やつぱり君は鈍すぎる！ 抱きしめられたうえに、耳にキスマでされていたじゃないか！ ああ、やつぱり、アイツはやめておけ！ 君みたいに純粋な女の子が、あいつに弄ばれているのを見ていられない。所構わず手を出してくる破廉恥変態野郎なんかとは、即刻別れた方がいい！」

社長の言うことは的を射ているが、私は一応竹若さんの援護に回る。

「あ、や、ま、まあ、所構わずっていうのは確かにそうなんですけど！ でも、すごく頼りになるんですよ。私がピンチの時には、必ず助けてくれるんですから」

「まあ、俺のSPを務めているくらいだからな」

「それに、今はちゃんと彼のこと、好きですし……。私、男の人に慣れてなかったから、男性と接する時はいつも緊張していたんですけど、彼だけはドキドキの種類が違ったん

ですよ。緊張するけれど、もつと傍にいたい、みたいな」

当時、彼に対して抱いていた気持ちを出し、頬がほんのり赤くなる。

「あの策士のことだから、君に告白する時のシチュエーション作りも完璧だっただろ？」

「なんでニヤニヤしているんですか、社長。……確かにそうでしたけど」

「だよな。どうせ、小向日葵君が逃げられないような状況を作ったりしていたんだろ、全く目に浮かぶよ」

社長のセリフを聞いた私は、カッと目を見開き、身を乗り出した。

「そうなんです！ いきなり彼が総務部に乗り込んで来て、車で連れ去られたんですよ！ しかも私、財布も携帯も持っていないくて……」

「あの、夕日が見える岬だろ？ 何日か前から、竹若がネットや雑誌で情報を集めていたぞ」

「どうして、それを不審に思わなかったんですか！」

「だ、だって、まさか、そこに小向日葵君を連れて行くなんて思わないだろ。まあ、でも、綺麗な夕日を見られてよかったじゃないか」

社長は私の肩を叩いてなだめるが、私は全く納得できずに声を荒らげる。

「夕日なんて見る余裕はありませんでしたよ。いきなり『付き合ってください』って言うてきたんですよ！ しかも、『結婚を決定したものとして、私と交際してください』っ

て、どういうこと!? 結婚が『決定』したものって、なんなのよ! 普通、『前提』でしょ!!」

大声を上げると、社長は慌て始めた。

「小向日葵君、落ちつけっ」

しかし、社長の声は私の耳には届かなかった。

「オマケに、驚いて何も言えない私に提案してきた『小向日葵さんが私と付き合うか、私が小向日葵さんと付き合うか。どちらにします?』ってセリフも、まるで意味不明! それ、選択肢になつてない!」

「こ、小向日葵くん、小向日葵くん! 落ちつけ、落ちつけ、どうどう」

社長がなだめてくるが、ヒートアップした私は止まらない。

「そのうえ、いきなり左手の薬指にダイヤのついた指輪を嵌められて!! とどめは『外したら、明日はその指に結婚指輪を嵌めてあげますね。もう用意はできていますので』って、もう、なんなのよー!」

私は勢いよく立ち上がり、両手を握りしめて絶叫した。すると、社長が私の肩を掴んで、ソファに座るよう促す。

「それだけ竹若は君のことが好きだってことじゃないか。いいじゃないか、恋人同士! 俺なんて、俺なんて……」

いきなり社長の声のトーンが落ちた。そしておもむろに立ち上がったかと思うと、肩を落としてトボトボと社長室を出て行ってしまった。

「あ、あの? 社長? インタビューはこれからなんですけど……」

パチパチと瞬きを繰り返す私の前で、扉が静かに閉まった。

「社長がいなくなったら、仕事ができないじゃない。もう」

と、ため息をついていたら、扉の開く音がした。

「よかった。戻ってきてくれたんですね」

パツと振り返ると、なんと噂の人物、私の彼氏様が優雅な足取りでこちらに近付いてくるではないか。

「ここにいたのですか」

そう言つて、ソファに座っている私を抱きしめてくる。

「ちよ、ちよっと、放してください!」

「嫌です。私は片時もあなたと離れていたくないのです。それにしても、社長は許せませんね。私の愛するユウカと、二人きりでいたなんて。報復させていただきます」

「あ、あの……」

私の恋人は笑みを浮かべつつ、絶対零度の冷気を放っている。

クツクツと笑っている彼氏様の背中に、黒い翼がついているように見えるのは、私の

目の錯覚だろうか。

このお話は、社長付秘書兼S Pの竹若和馬かずまと、新米OL小向日葵ユウカが結ばれた夜の翌朝から始まる――

1 初めての朝を迎えた恋人同士って、こんなものなの!?

大きなベッドの上で目を覚ますと、彼はいなかった。扉の向こうから何やら物音が聞こえるので、すでに朝の支度したたをしているのかもしれない。

「私も起きなくちゃ」

けれど、全身がダルくて体をうまく動かせなかった。仰向けあおむけになって、ゆっくりと深呼吸をする。

大きく息を吐くと、お腹の奥がツキンと痛んだ。右手でお腹を擦りながら、私は顔の前に左手をかざす。薬指にはダイヤモンドの付いた指輪が嵌はまっている。

指輪を見ながら、昨夜のことを思い返す。

「今夜は放さない」と言われて、受け入れたのは自分の意志だが、それにしあって、それにしあって……!

昨夜のことを思い出すだけで、顔が活火山のように熱くなる。

――うわあ、私、『初体験』したんだよね!?

裸に肌掛けを巻きつけた状態でのたうち回っていると、ノックのあとに扉が開いた。そこから顔を覗かせたのは、もちろんこの部屋の主。すでにワイシャツと黒いスラックスを身に着け、濃いグレーのネクタイを締めている。

「おはようございます、ユウカ」

美しいお顔を爽やかに微笑まれ、ドキンと心臓が跳ねる。朝の挨拶をしただけなのに、まるで俳優のように様になっていた。

「お、おはようございます」

首だけ起こして挨拶を返す。力の入らない腕を支えにして、なんとか身を起こそうとしていると、彼の手が私の肩にかかった。そしてベッドに押し倒される。

「え、あの……」

整った顔が近付いてきたと思ったら、彼にキスをされた。上唇、下唇、と順番に吸いつかれ、慌てて拳で彼の胸をドンドンと叩くと、ようやく唇を離してくれた。

「な、何を？」

「恋人同士の朝の挨拶といえれば、甘いキスと決まっているではないですか。常識ですよ」ニッコリと笑みを浮かべながらそんなことを言う彼に、顔が引きつる。

「嘘です、そんなの！　いくら私でも、そんなの常識じゃないことくらい知って……んっ！」

ふたたび唇を押し当てられてしまい、最後まで言わせてもらえなかった。

今度は舌を差し込まれる。首を横に振ったが、彼は顔の角度を少しずらずらし、舌が一番深くまで侵入できる位置を探り出す。

そして、逃げ回っていた私の舌を捉えた。舌を絡められ、強く吸われる。目覚めた直後から淫靡なキスをされ、頭が上手く働かない。

「ふ、んん……」

小さく喘ぐと、彼はようやく唇を離してくれた。

「そうそう。こちらにも挨拶をしなければ」  
彼は楽しげに囁き、私の体を包んでいた肌掛けを取り去った。先ほどのキスに翻弄されて朦朧としている私は、肌掛けを取り戻すことさえできない。

滲む視界の中、艶やかな黒髪が私の胸元で揺れている。ほんやりと眺めていると、彼が左胸の先端を口に含んだ。昨夜散々弄られたソコは、いまだに敏感で、舌で転がされるだけでたちまち感じてしまう。

「あ……」

吐息とも喘ぎともいえない声が、私の口から零れた。官能の色を帯びているその声に、彼は氣をよくしたらしく、いっそう丹念に乳首をしゃぶってくる。何度も舐め上げられ、体が疼き始めた。乳首は、刺激を受けてますます硬くなる。



唇をすぼめてチュクチュクと無心に吸い付く彼は、まるで母親の愛情を独り占めしようとしている赤ちゃんのように。

……しかし、この彼が、赤ちゃんのように無垢であるはずがない。胸に意識がいつていた私は、彼の手が秘部を目指していることに全く気がつかなかった。彼の長い中指が割れ目に侵入してきた。

初めて体を重ね、男性を受け入れたソコは、まだぼつてりと腫れているような感覚がある。昨夜、お風呂に入ってもらったから、ソコもすっかり綺麗になったはずなのだが、キスと胸への刺激でまたぬめりを帯び始めていた。

「ココにもおはようのキスをしてあげたいですが、それはまた今度にしましょう。……自分を抑えられそうにないですから」

意地悪そうにクスリと笑うと、彼は尖らせた舌先でチロチロと私の乳首を舐めながら、中指で秘部を弄る。長い指が隆壁を探るようにそろそろと動き、根元まで入れられ、ゆつくりと抜かれる。そしてふたたび内部を擦られると同時に、左の乳首をジュツと音を立てて吸われた。

「ひ、あっ……」  
快感で視界が潤み、涙がホロリと零れる。涙の温かさを感じながら、私は小刻みに体を震わせた。

乳首を吸われる一方で、彼の指先がイイ所を擦り、押し上げ、搔き回す。

「やあっ……ん！」

視界が白く霞み、新たな愛液が生まれたのを感じた。

「だ、だめ……」

浅い呼吸を繰り返しながら何度も首を横に振るが、彼の舌の動きも指の動きも止まる気配はない。今度は右の乳首を吸われ、彼の口内で好き勝手にされる。円を描くように舐られ、体が疼く。

その疼きのせいで、ヌプヌプと抜き差ししている指を締めつけてしまった。指は二本に増え、少しずつ挿入の速さと深さが増してゆく。胸も秘部も攻められ、疼きは全身へと広がっていった。

私の中で熱が渦巻き始め、どうすることもできなくなる。

「あ、あんっ」

私は与えられる愛撫の前になすすべもなく、小さな啼き声を上げたのだった。

軽く絶頂に達し、私は胸を上下させた。彼は私の胸にキスマークを一つ付け、起き上がる。そしてベッドの端に腰かけ、私を起き上がらせて肌掛けを掛けてくれた。

さらに自分の胸に抱き寄せて、私のこめかみに優しくキスをした。やんわりと押し当

てられた唇は嘘へと滑り、そこにもチュツと音を立ててキスを落とす。それで終わりかと思つたら、今度は頬にも唇を当てられた。

彼は今にも蕩けそうな表情をしている。

——なんだろう、この異常なほどに甘い雰囲気は。

彼は嬉しそうに微笑んでいるけれど、私は羞恥と困惑で俯いてしまう。

「あ、あの、竹若さん……」

まだ下の名前で呼び慣れていないので、つい苗字で呼んでしまった。

すると顎に手を添えられ、強引に上を向かされた。

「私のことは名前で呼んでくれませんか？ 昨晩は、あんなに呼んでくれたじゃないですか」

彼は漆黒の瞳でまっすぐに私を見つめてくる。

「あ、えと、それは……」

そんなふうに見つめられたら、ますます恥ずかしくなってしまう。

昨晩は気持ちが高まっていたから……

冷静さを取り戻した今は、名前で呼べる気が全くしない。

視線を彷徨わせていると、親指の腹で唇をなぞられた。

「せっかく恋人同士になったというのに、苗字で呼ばれるなんて淋しいじゃありません

か。この可愛い唇で呼んでください。愛らしい声で、私の名前を聞かせてください」

顔がボンツと熱くなる。

——ホント抵抗なく恥ずかしい言葉を口にするよね！ フランス人かイタリア人の

血でも流れているんじゃないの!?

シャイな日本人気質の私には、とてもじゃないけど、そんなセリフは吐けない。

「い、今ですか？」

「ええ、もちろん」

彼は間髪をいれずに返事をする、私を見つめたまま、目元を緩ませた。

恋人同士が、お互いを名前で呼び合うのは極自然なことだ。だけど！ だけど！ 今

まで苗字で呼んでいた人を、急に名前で呼ぶのは照れくさい。

「え……、うう、えと……」と呻いていると、温かい手で頬を包まれ、鼻先が触れ合い

そんな距離で瞳を覗き込まれた。

「そんなに難しいことでしょうか？ さあ、ユウカ」

たどえ呼べなくても、彼なら「仕方ないですね」と笑って許してくれるだろう。でも、

がっかりさせてしまうかもしれない。それは嫌だ。

ほんのちよつとでも彼を喜ばせることができるなら、恥ずかしさくらいは堪えて呼ん

でみようかな。よし、女は度胸だ！

彼の瞳をまっすぐに見つめて、私はすっと息を吸い込んで、彼の名前を呼んでみた。「か……、和馬さん」

ブワツと顔が熱くなる。恥ずかしさで暴れたいのを必死で耐え、彼の様子を窺う。するとわずかに間を空けたあと、彼は満面の笑みを浮かべた。

「ああ、なんて幸せなんでしょうか」

よかった、喜んでくれたみたい。

呼び方を苗字から名前に変えただけなのに、彼との心の距離が近付いた気がした。

手は頬から外されたが、私は視線を逸らすことなく、竹若さん……じゃなかった、和馬さんをじっと見つめていた。

今まで彼は私にたくさんの喜びをくれた（困ることもたくさんされたが）。だから、これで少しは竹わ……間違えた、和馬さんが喜んでくれたら私も嬉しい。

「あ、あの……」

「私の名前は『あの』ではないですよ」

すかさず突っ込まれる。

「ご、ごめんなさい。まだ慣れていないので……」

「では、慣れるためにもっと呼んでみるべきです。さあ、どうぞ」

困った。それにそんなに期待に満ち満ちた顔で待ち構えなくても……

瞬きを一つしたあと、小さな声で「……和馬さん」と口にする。

「ユウカに呼んでもらうと、自分の名前が特別なものになったように思えます。今までこんなふうに感じたことは一度もありません」

和馬さんは私を胸に抱きこみ、額や瞼、頬に次々と唇を寄せてくる。まるで飼い主にじゃれつく犬のようだ。

まあ、和馬さんの場合は犬じゃなくて、黒豹なんだけだ。

嬉しさをストレートに表すのはいいが、いい加減このやりとりを終わりにして欲しい。このままではのぼせて、またベッドに伏せてしまう。

キスの雨はいつこうにやみそうになかったけれど、私は彼の口元をなんとか手の平で覆った。

「で、でも、過去の彼女さんにとって、名前と呼ばれていたんじゃないんですか？」

学生時代に恋人がいたという話は、聞いたことがあった。純粹に疑問に思ったから訊いたのであって深い意味はなかったのだが、和馬さんはちよっぴり気まずそうに視線を落とした。

「確かに彼女と呼べる人はいましたが、名前を呼ばれて、こんなにも幸せだと感じたのは、ユウカが初めてです。それだけ、私にとってユウカが、特別な存在なんですよ」

頬を緩ませて見つめられ、またしても心臓の鼓動が速くなる。

「そ……うですか……」

和馬さんは甘いセリフを次々と口にする。

が、慣れていない私は、やっぱり恥ずかしい。肌掛けをギユウギユウと握りしめ、「アー、ウー」と俯いて呻く。

そんな私に呆れることなく、和馬さんは優しく髪を撫でてくれた。

「朝ご飯にしましょうか。準備は調っていますので」

「あ、は、はい」

俯いたままコクコク頷くと、頭に大きな手がポンと置かれる。

「新しい着替えはそちらのクローゼットに用意しています。よかつたら着てください」

そう言って、和馬さんは寢室の奥にあるクローゼットを見やる。

「え？ 新しい着替え？ 私が昨日着ていた服は？」

きょとんとして彼を見上げると、ニッコリと笑顔が返ってきた。

「今、洗濯しています。下着とストッキングは丁寧に手洗いしましたので、生地は傷んでいないはずですよ。心配しなくても大丈夫ですよ」

「……は？」

——自分の彼氏に下着を洗われるって……しかも手洗いって、どんな羞恥プレイ!?

私は、ふたたび激しく悶絶した。

和馬さんが寢室から出たあと、急いで着替えを済ませた。

それから顔を洗ってキッチンに向かう。すると、小さなテーブルセットの上に、こんがり焼かれたトーストとグリーンサラダ、キウイや母が載ったヨーグルトが置かれていた。

椅子に座ると、和馬さんが温かいカフェオレを持ってきてくれる。

「簡単なもので申し訳ないですが」

「い、いえ。十分です。いただきます」

パチンと手を合わせ、モグモグと食べ進める。本当は訊きたいことがあるのだが、言いたくない。

——どうやって下着を用意したんだろう。

実はクローゼットの下のように紙袋があったのだ。覗いてみると、小花柄の下着や可愛らしいレースが付いた下着が入っていた。怪訝に思いながらも身に着けたら、驚くことにサイズがぴったりだった。

どうして私のカップのサイズを知っているのか。そして、最大の謎……どうやって女性物の下着を手に入れたのか。まさか、和馬さんが買いに行ったのだろうか？

気になるけれど、訊けない。カフェオレを飲みながら、正面に座っている和馬さんをチラチラ見ていると、クスツと笑われた。

「下着のことですか？」

——なぜわかった!？」

相変わらず勘のよすぎる彼に、私は思わず目を丸くした。

「中村君がくれたんですよ。『願掛けというか、お守りというか、そんな感じかな。もしかしら、もしかするかもしれないから、持っておきなさいよ』と言って、私に差し出してきたんです。なので、ありがたく頂戴しました。さすが付き合いが長い分、私のことをわかっていますね」

——中村君……ということとは同じ部署の留美先輩か！ 男性に何を渡しているんですか！ いつも私のことを可愛がってくれて、感謝していますけど、それはおせっかいというものですよ！

顔色を赤や青に変えながら、和馬さんに訊ねる。

「そ、それって、いつのことですか!？」

彼は少し首を捻り、

「今年に入って、少し経った頃だったと思います」  
と、答えた。

そういえば年明けに仕事に行ったら、留美先輩にいきなり胸を鷲掴みにされたんだよね。『ふうん、70のBか……』とか呟いていたけど、それってそういうことだったの!？」  
もー、先輩の馬鹿!

テーブルに額を押し付けていたら、留美先輩の高笑いが頭に響いたような気がした。

## 2 デザートは『わ・た・し!？」

昨夜のせいで体のあちこちが痛かったけれど、仕事を休むほどではない。朝食のあと、和馬さんの車に乗って一緒に会社に向かった。

「ありがとうございます」

会社の駐車場に着き、シートベルトを外そうとしていたら、

「今夜は、食事に行きましょうね。仕事が終わったら、ここに来てください」  
と、爽やかに誘われた。

「食事ですか?」

「はい。姉夫婦が店を出していますね。その店の料理はなかなか美味しくて、いつもお客様でいっぱいだそうです。ユウカと付き合い始めたお祝いに、本日は昨日行こうと

していたんですよ。でも、私の我慢が利かなかったもので……」

そう言うって、和馬さんは困ったように笑う。彼のセリフに、私は彼に負けないほど困った顔をして、頬を引きつらせた。頼むから、昨日のことは思い出してくれるな。恥ずかしくて悶絶死する。

「なので、仕切り直しをしようかと。何しろ、昨夜はユウカが私の恋人になった記念すべき日なのですから」

優しい視線を向けられ、私は断ることができなかった。

一日の仕事を終えて地下駐車場に行くと、ちょうど社長を送迎してきた和馬さんが、社長と一緒に車で帰ってきたところだった。

「小向日葵君じゃないか。お疲れさん。どうしてこんなところにいるんだ？」

社用車から降りてきた社長が私に気づいて、声をかけてくる。

「お、お疲れ様です。あ、あの、その……」

和馬さんと待ち合わせしていることを、社長に言っているのかどうかわからず口もついていると、和馬さんが運転席から降りて私の横に立った。

「これから私と食事に出掛けるんですよ」

と言って、私の腰に腕を回してソツと抱き寄せる。そして、つむじにチュッとキスを

落としてきた。どうやら社内的に私たちの関係はオープンにしても問題ないようだ。

が、彼の行動は問題だらけ。上司の前でイチャイチャするのは、まずいだらう。

「ちよ、ちよっと放してください！」

慌てて和馬さんから離れようとするが、彼の腕の力は緩まない。

「じゃ、社長、あの、その……」

戸惑っていると、「……なんて羨ましい」という淋しげな社長の呟きが返ってきた。

「は？ 社長？」

てつきり怒声が飛んでくるかと思ったのに、拍子抜けだ。社長はションボリと肩を落として去っていく。

「可哀想に、社長の想いは当分実らないようですね。まあ、私には一切関係ありませんので、どうでもいいのですが」

「和馬さん？」

見上げると、なぜか彼は清々しい表情をしていた。

社長がトボトボと去っていったあと、私は朝と同じように和馬さんの車の助手席に乗る。途中まで細い道に入ると、レストランが見えてきた。路上からガラス張りの窓越しに店

内を窺うと、ほぼ満席。郊外の隠れ家的な名店なのだろう。

「ずいぶん混んでますね。入れるんでしょうか？」

私の質問に、和馬さんは前方を見つめたまま微笑む。

「ご心配なく。おととの晩に入れた予約が、まだ有効だと言っていましたから」

「……は？ おととい？」

一瞬間まった。そんな私に構わず、和馬さんは華麗にハンドルを切って、お店の駐車場へと入ってゆく。

「恋人を連れて行くので、一番いい席をお願いします」と、頼んでおきました」

「……へ？」

さらに固まる。

——おとといの晩って何？ 告白する前に『恋人』って!?

「あ、あの、こんなことを言うのはおこがましいですけど……。私がお付き合いをお受けしなかった場合もありえたかと……」

あまりに気が早くないか。万が一、億が一、私がどうにか和馬さんの告白を断ることができた場合、彼はどうするつもりだったんだろう。

呆然と彼の横顔を見つめる私。

「ご心配なく。その時はユウカが『うん』と言ってくださるまで、私が諦めなければい

いだけです。至極単純なことですよ」

和馬さんは目をやんわりと細めてそう言い、車のエンジンを止めた。

「ええと、それでも私が『うん』と言わなかった場合は？」

ビクビクしながら彼の横顔を窺う。

「その時は、言っていたように仕向けるでしょうね。……どんな手を使っても」  
チャリと私を横目で見た和馬さんの瞳に、危険な光が揺らめいていたのは、気のせい  
だと思いたい。

そんな彼から逃げるように車を降りると、和馬さんは音もなく私の傍に立ち、指を絡めて歩き出した。いわゆる『恋人繋ぎ』でお店へ向かう。

「あ、あの、ちょっと放してください！」

普通に手を繋ぐだけでも、私は恥ずかしいのだ。なのに、こんな繋ぎ方をされてはたまらない。私がありとあらゆる努力をして、和馬さんの手を解こうとした。だが、ますます強く握られてしまい、恋人繋ぎのまま、和馬さんのお姉さんご夫婦と対面することになってしまった。

「和馬君、よく来てくれたね」

「まあ、とても可愛らしいお嬢さんだわ」

店に入ると、コック服を着たガッチリ系のお兄さんと、淡い黄色のエプロンを着けた人懐っこい笑顔のお姉さんに出迎えられた。和馬さんは、私をほんの少し前に出して紹介する。

「ご無沙汰しております。こちらが私の最愛の恋人のユウカです。可愛いでしょう」

顔がドカンと熱くなった。

「あ、あ、あ、あの、私は、その……」

『恋人』という紹介のされ方に慣れていない私がアワアワしていると、和馬さんは私を後ろから抱きしめてきた。

「彼女にベタ惚れなんですよ」

オマケにチュッと髪にキスを落とす。人前でこんなことをされては、私は羞恥の海で溺れ死んでしまう。

私は助けを求めてご夫婦に視線を向けた。ところが、二人はなぜか慌てふためき始め、私の視線にまるで気がつかない。

「おい！ あの和馬君が人前でイチャついてるぞ！」

「やだ、信じられない！ 愛想笑い以外の笑顔を見られるなんて！」

まるで我が子が初めて歩いた光景を目にした親のように、二人は感激している。

——ちよ、ちよっと！ 誰がこの場を収めるの!?

と、さらにパニックに陥っていると、

「席に案内していただけますでしょうか。ユウカも私も空腹ですので」と、和馬さんが口にした。

やれやれ、どうにか羞恥の海から逃れられたよ。

出されたお料理は、どれもこれもすごく美味しかった。

ただ……正面に座った和馬さんが終始私を見つめていなければ、もっと美味しく味わうことができただろう。このお店のテーブルはちよっと小さめなので、彼との距離が近く、落ちつかないのだ。

私は俯いたまま、リングのコンポートをちよこちよこ口に運んでいた。

ああ、これも美味しい。

「満足していただけたようですね」

優雅な仕草でコーヒーマップを置いた和馬さんが笑顔で言う。

ちなみに、彼の前にデザートはない。私にくれたからである。

「は、はい。どれもこれも美味しかったです」

彼の顔を正面から見る勇氣はなく、私はさらに俯いて彼の分のコンポートを食べ始める。



すると彼は腕を伸ばし、私の頭を長い指でソツとつついてきた。勢いよく顔を上げると、和馬さんと目が合ってしまう。

「な、な、なんででしょうか？」  
怯えながら訊ねると、

「いえ、ユウカはつむじも可愛いのだと思っちゃってね。つい、手が伸びてしまいました」と、彼は言い、ニツと口角を上げる。

「あ、えと、別につむじなんて、可愛いものではっ」  
スプーンを握りしめて固まっていると、頭に伸ばされていた手がスツと私の口元に下りてくる。

「この唇も実に可愛らしい。……あとでじっくり味わわせていただきますよ。私はデザートを食べていませんから、その代わりに」  
私にだけ聞こえるように、和馬さんが囁いた。

「ひいっ」  
彼が放つ妖しいオーラに怯えてしまい、私は首を小刻みに横に振ることしかできなかった。

### 3 ご褒美パニツク

和馬さんに見つめられ尽くした食事が終わった。

人気のお店ということ、入り口には待っている人がいる。すでにデザートと食後の飲み物まで終えたのだから、早々に立ち去るべきだろう。まあ、それはただの建前で、私が早くこの状態から抜け出したいだけなのだが。

誰もが見惚れる極上の笑顔で見つめられ続けていたら、落ちついていられるわけがない。

「あの、そろそろ帰りませんか？」

「そうですね。帰宅ラッシュを過ぎたので、道路も空いているでしょうしね」

私が急いで席を立とうとすると、和馬さんはすかさず後ろに回って椅子を引いてくれる。

そして、

「さあ、どうぞ」

と言って、ごく自然に右手を差し出してきた。

「は？」

手の平と和馬さんの顔を交互に見ていると、彼に左手を取られた。そして、素早く恋人繋ぎをされる。

「あ、あの、何を!？」

「手を繋いだけですよ。ああ、それともお姫様抱っこがいいですか？ 私はどちらでも構いませんが」

そう言って、彼は空いている左手も伸ばしてくる。

「いやいやいや！ お断りです！」

彼の人目を引く容姿が原因なのか、私が騒がしいのが原因なのか、店内にいる人の大半がこちらを見ている。

こんな中で、お姫様抱っこされるなんて耐えられない！

顔を赤くしたり青くしたりしていると、和馬さんがスッと目を細めた。

「……では、このままでいいですよね？」

恋人繋ぎも恥ずかしいが、お姫様抱っこよりはまりました。

私は、「……はい」と、小さく頷くしかなかった。

念のために言うておくけれど、私は和馬さんに触られること自体は、その、まあ、嫌

じゃ……ない。

ただ恥ずかしいだけなのだ。だからつい、過剰に反応してギャーギャー騒いでしまう。

でもそれって、傍から見たら、すごく子供っぽいよね。そんな私じゃ、大人っぽい和馬さんとは釣り合わないんじゃないかって思ってしまう。

それに二十一にもなつて、落ちつきのない私に、そのうち和馬さんが呆れちゃうんじゃないかっていう不安もある。

今はこれまでの彼女と私が、あまりにもタイプが違うから可愛がってくれているのかもしれないけれど、気持ち揺れることだってあるだろう。

人の気持ちに「変わらない」という保証はないのだ。

けれどできることなら、ずっと和馬さんの隣にいたいなと思えるくらいに、私は彼ることが好き。

だから大人っぽい和馬さんに相応しい女性になりたい。そう思っているけれど……

大きな渋滞に巻き込まれることもなく、車は順調に進む。

「ユウカ、どこか寄るところはありますか？」

そう訊かれた私は「ありません。家に帰ります」と、答えた。

実は昨日、実家から母特製のビーフシチュー（これだけは母が得意なのだ）が届いた

のだ。じっくり味わう予定だったのに、食べ損ねてしまった。

——誰かさんに攫われたせいでね！

恨めしい目つきで運転席の和馬さんを見れば、

「ふふっ。そんな可愛い流し目をされたら、私は今夜もユウカを寝かさない自信がありますよ」

と、想定外の言葉が返ってきた。

いくら恋愛経験値の低い私でも、今の和馬さんの言葉の意味はわかった。「寝かさない」とは、一晚中話をしたり、テレビを見たりすることではないのだと。

顔がカアツと一気に赤くなる。

「べ、別に、私は流し目なんかっ！」

和馬さんがスツと顔を寄せてきて、私にチュツと小さくキスをする。

「さあ、あなたのアパートに着きましたよ。まあ、私はユウカに誘われようと誘われまいと、一晚中あなたを放すつもりはありませんがね」

シートベルトを外した彼が、覆いかぶさってきた。

彼の熱い視線に、私の心臓がトクン、と跳ねる。

ゴクリと息を呑んで見つめ返すと、フツと小さな苦笑が降ってきた。

「……では、あなたの部屋に向かいますか」

彼の瞳が妖しく光るのを見て、背中に汗が伝う。

シートに体を深く預けたまま、和馬さんを見上げた。

辺りはかなり暗かったが、アパートの付近には外灯があるので、お互いの表情が見取れる程度には明るい。

薄明かりに照らされた和馬さんは、本当に綺麗だ。

やや長めの前髪。形のいい瞳。通った鼻筋。軽く口角の上がった唇。シャツの襟元から覗く首筋。

ただこちらを見つめているだけなのに、どうして彼はこんなに色っぽいのだろうか。そんな視線を向けられては、指一本動かせない。まるで蛇に睨まれた蛙だ。しかも、捕食されることが確定した蛙。

一度とはいえ、私は和馬さんと肌を重ねた。

だけど、もう一度経験するほど心の準備ができていなかった。

そもそも、私はまだ、和馬さんの彼女になったことを信じられていないし、『大人の恋人同士の付き合い』というのわからないのだ。

彼の私への接し方は時折度を越しているが、大抵はスマートだ。社会人としても、男性としても、彼氏としても申し分のない和馬さん。

そんな彼と、早く本当の大人の恋人同士になりたいけど……

——ど、どうしたらいいの!?

涙で視界が霞んでゆく。

そんな私を見た彼が、ふいに表情を和らげる。

「少々、いじめ過ぎてしまいましたね」

そう言って、切れ長の目元をわずかに緩めた。私は詰めていた息をゆっくりと吐き出す。

「申し訳ありません。あなたの困り顔にソッられてしまって」

これまでの真剣な表情とは打って変わり、和馬さんは穏やかに笑いながら、私の目元をソッと拭ってくれた。

「怖い思いをさせてしまいましたか?」

私は少しだけ間をおいてから、おずおずと頷く。

『恐怖』というよりも『パニック』という感じだったのだが。

和馬さんは、改まって「申し訳ありませんでした」と謝罪する。

「本気で困らせたわけではないのですよ。ユウカはどんな表情をしていても魅力的ですが、私が一番好きなのは、あなたの笑顔ですから」

見惚れるほどの微笑をたたえて、和馬さんがそう告げる。

「私はあなたの笑顔に心を奪われました。純粹で、明るくて、まっすぐで。あなたの笑顔は、私にとって何にも代えがたい宝物なのです」

彼は冗談で、こんなことを言う人ではない。だからこの言葉は和馬さんの嘘偽りない気持ちなのだろう。だが、あまりに直球で言われると、恥ずかしくてたまらない。

和馬さんはさらに言葉が続ける。

「ユウカの笑顔を守ることが私の役目です。あなたの笑顔を守るためでしたら、私はどんな手段をとることもいといません。たとえ法を犯しても」

爽やかな口調で爽やかではないことを言われ、私の顔は盛大に引きつった。

「さすがに法律を犯すのはマズイですよ! え、えと、そのお気持ちだけで……」

しかし、私の申し出は笑顔で一蹴される。

「どうぞご心配なく。私はそう簡単に警察に捕まるような愚鈍な人間ではありませんので」

——『警察に捕まらないから大丈夫☆』と言われて、『だったらいいか!』なんて言いませんから!

恐怖でブルブルと震えていると、和馬さんは大きな手で私の頬を包み、両瞼、鼻先、最後に唇にキスをした。

唇へのキスは軽く触れるだけのものではなかった。強く押し当てられ、わずかに離れたかと思えば、角度を変えてまた押し当てられ……

しかも時折、舌先で私の唇をチロリとなぞってくる。唇の輪郭を舐めながら、私の下

唇をやんわりと噛む。感触を楽しむように何度も食まれ、そしてふたたび塞がれる。しだいにベッドの上で彼に抱かれている最中に感じていた感覚が蘇り、私は恥ずかしさで泣きそうになってしまった。

「や、やめっ……、んっ」

唇が離れたほんの一瞬に抗議の声を上げるが、和馬さんは聞き入れる様子もなく、キスを続ける。さらには和馬さんの舌がスルリと口内に忍び込み、私の舌を捉えた。絡まれ、吸われ、クチユリという湿った音が響く。

その音が耳に届いた時、またしても涙が滲むのを感じた。それは羞恥や困惑ではなく、怒りの涙。恥ずかしさが頂点に達すると、どうやら怒りに変わるようだ。

——何すんの!!

いっこうにやまない行為に段々と腹が立ってきた私は拳を作り、渾身の力で和馬さんの胸を叩いた。ドン、ドン、と鈍い音が車内に響くが、状況はいっこうに変わらない。

『んー! んー!』と何度も呻くと、ようやく彼の唇が離れた。

「ついさっき、『困らせたいわけではない』と言ったじゃないですか! 言いましたよね!!」

「ええ、言いましたよ。ですが、これはユウカを困らせるためではなく、先ほど踏み留まった自分への褒美です」

「は? 褒美?」

頓珍漢なことを言い出した和馬さんに、私はポカンと口を開ける。

「ええ。通常の恋人同士であれば、食事のあとは部屋かホテルにお泊りですよ。それを我慢したのですから、褒美をいただいてもいいでしょう?」

さも自分が正しいと言わんばかりの和馬さんに、ふたたび怒りが湧く。

「なんですか、ソレ! 納得いきません!!」

声を荒らげると彼の瞳に肉食獣の光が宿った。

「では、納得いくまでお教えしましょうか? ……その体に」

ジリツと距離を詰めてくる和馬さんを見て、私はもげるほどのすさまじい勢いで首を横に振ったのだった。

#### 4 ご褒美、ふたたび。

私の理解の範疇を超えた攻防を繰り返したあと、やっと車を降りる。もうぐったりだ。結局あれより先に『事』は進まなかった。

とはいえ、和馬さんは『照れるユウカは殺人的に可愛いですね』とのたまひ、私の額

にチュッと軽いキスを数回、いや、数十回してからようやく解放してくれた。  
ふう、やれやれである。

こんなにも熱烈に想ってくれるのは嬉しいが、ドキドキが止まらなくてちよつと大変。私の心臓、ドキドキしすぎて疲れ果ててはいないだろうか。いや、逆に鍛えられているかも？

ボタンツと勢いよく扉を閉めてクルリと振り返ると、いつの間に車から降りたのか、和馬さんがニコニコしながら立っている。

「さあ、行きましようか。部屋まで送りますよ」

そう言っ、私に右手を差し出してきた。私は呆れながらも、その大きな手の平に自分の左手をソツと乗せて……

などということはない。

「一人でも平気です！」

差し出された手を振り払い、睨み上げる。

岬に連れ出されたあの日から今の今まで、何度となく心臓が爆発しそうになったのだ。今日のところは、もう勘弁して欲しい。私の心臓のために、なんとしてでも一人で部屋

に戻らねば！

サツと彼の脇を抜けると、すぐさま背後から抱きしめられた。

「ぎゃあ！ 放して！」

暴れる私を押さえ込むように、彼は腕の力を強める。

「私も一緒に行きます」

「子供扱いしないでください！ 一人で大丈夫です！」

彼の腕を剥がそうとバタバタ暴れる。

「ああ、ユウカ。誤解しないでください。私はあなたを子供扱いしたわけではありません。一秒たりともあなたと離れていたくないだけなんです」

そう言っ、和馬さんはさらに強く抱きしめてくる。

そのセリフと仕草に、ちよつとだけキュンとする。

男性に求められるなんて初めてのこと。すごく幸せだ。

私は鈍感なタチなので、こうしてわかりやすく愛情を表してもらえるのは、ある意味助かるけれど……

しかしいつの間にか耳にキスをしたり、手が若干の不埒な動きをしていることに気づき、我に返った。

「もう、やめてください！ こんなことをする和馬さんは嫌いです！」

周囲に響き渡るほどの大声で叫んでも、「あなたがどんなに私を嫌いでも、私はあなたを愛していますよ」と、囁いてくる。

暖簾に腕押し。糠に釘。豚もおだてりや木に登る。あ、これは違った。

——ああ！ どうしたらいいの！！

和馬さんの手をバチバチと叩いていたら、腕がスツと離れた。

振り返ると、彼は私から一歩離れたところにいた。

「ですが、ユウカに嫌われるのは嫌です。なので、今日のところは大人しくここで見送ってあげます」

「は？ 『見送ってあげます』 って……なんか、ちょっと違うんじゃない？……」

戸惑う私の言葉を遮り、和馬さんがやんわりと口角を上げた。

「大人しく見送って差し上げますので、明日はご褒美をくださいね」

彼の口の端が楽しそうに上がる。

「ご褒美？ なんですか、それ!？」

「わからないのでしたら、一緒に行きます、ベッドの中まで」

見送る、とさつき言ったばかりではないか。しかも『ベッドの中まで』とは、どういうことなのだ。

私は必死の形相で彼の手を握りしめながら懇願する。

やめて！ 本気で心臓がもたないから！

「それは困ります！ お願いですから、今日は帰ってください！ ね？ ねっ!？」

すると、和馬さんは意外にも駄々をこねることなく、

「はい、わかりました。他でもないユウカのお願いですから、聞いて差し上げますよ。

ですから明日はご褒美をくださいね」

と、爽やかに微笑み、「おやすみなさい」と左手を小さく振った。

——ええと、ええと……。ご褒美ってどういうこと……

翌日。仕事が終わると同時に和馬さんから『地下駐車場で待っています』という内容のメールが入った。

その文章を目にした途端、昨日のやり取りが脳裏を過ぎる。

帰り支度を調べ、ドキドキしながら廊下を進む。地下駐車場に着くと、一台の車が私の前で停まった。

——和馬さんだ。

彼は運転席から腕を伸ばし、助手席の扉を開けてくれた。

「どうぞ」

爽やかな笑顔向けられるが、私の体は強張ったまま。

「あ、ありがとうございます……」

私はビクビクしながら車に乗り込んだ。

——和馬さんが言っていたご褒美って、一体なんなのだろう。できれば、ご褒美のことは忘れてくれていると嬉しいんだけど。

運転する彼をチラッと横目で窺うと、クスツと笑われた。

「なんで笑うんですか？」

「ユウカは素直で可愛いと、改めて思ってますね」

首を傾げる私に、よくわからない答えが返ってくる。

「はあ、そうですか？」

さらに首を傾げれば、彼はまたクスクスと笑う。

「そうですよ。私のメールを無視して、そのまま帰ってしまうことだってできたでしょう？ そうすればユウカは私に捕まることなく、無事に家へと帰れたのに」

「……ああー」

その言葉に愕然とした。

——なんて間抜けなんだ、私は！ 自ら毘にかかりに行くなんて！  
ゴクリと息を呑んだ。

——また、和馬さんの部屋に連れて行かれるの？

そして、あの大きなベッドで和馬さんに翻弄されるのだろうか。

妖しい熱に煽られ、自分が自分でなくなってしまうような感覚は、やっぱりまだ怖い。もちろん、和馬さんと体を重ねたことに後悔はないけれど……

何度も経験を重ねれば、いつか受け入れられるようになるのだろうか。彼氏がいる女性たちは、どうやってそんな自分と向き合ってきたのだろうか。

それとも、こんなふうに考えてしまうのは、私がまだまだ子供だから？ 和馬さんのこれまでの彼女さんたちは、思い悩んだりしたことはなかったのか？

ますます体が強張り、バッグの取っ手をきつく握りしめてしまう。  
窓の外を眺めもせず、ひたすら俯き続ける私に、彼は何も言わず、ただ車を走らせていた。

しばらくして、車が静かに停止した。

「着きましたよ」

恐る恐る顔を上げて窓の外を見ると、目の前には見慣れた光景が。  
そこは私のアパートの前だった。

——向かっていたのは、和馬さんのマンションじゃなかったの？



目を丸くして、和馬さんを見上げると、彼はわずかに眉を蹙めた。  
 「あなたは私のことを、どれほど我慢のできない酷い男だと思っっているのですか？  
 少々心外なのですが」

「あ、あの、そういうわけでは……」

視線を彷徨わせて口ごもる私を見て、彼は長い息を吐いた。

「正直に言えば、今すぐにでもあなたをベッドに連れ込んで、私の存在をあなたの体に  
 知らしめたいのですがね。唇を重ね、肌を合わせ……。それこそ寝る暇も与えずに」

淡々とした口調でそう言うと、和馬さんはふたたび息を吐き、私を見つめてくる。

「とはいえ、心の準備ができていないあなたに無体を働くほど、私は非情で強欲な人間  
 ではないつもりですよ」

凧いだ眼差しは彼の本心の表れだろう。

「ご、ごめんなさい……」

これから部屋に連れ込まれると勝手に思い込んで、彼を傷つけてしまった。体を小さ  
 くして謝罪すると、「いえ、謝っていただくほどのことでは」と苦笑混じりに言う。

「私のほうこそ、ユウカに謝らなければ。余裕のないところがありましたので」

照れ隠しなのか、和馬さんは何度も自分の前髪をかき上げている。

「そうなんですか？」

いつだって和馬さんは余裕綽々で、ワタワタしていたのは私一人だと思っていたのに。  
 思わず訊き返すと、和馬さんは目を細めた。

「そうですね。ずっと欲しかった女性を、ようやく自分のものにするのができたので  
 すから、余裕なんて一欠片もありません」

そう言って彼は指先でサラリと私の頬を撫でる。

彼の切ない想いが伝わってきて、私はジッと和馬さんの瞳を見つめ返した。すると彼  
 は、手をゆっくりと下ろす。

「ユウカの全てを力尽くで奪うことは簡単です。ですが、せっかく恋人同士になれたの  
 ですから、ユウカから私を求めて欲しいのです」

下ろした手で、バッグの取っ手を掴んでいる私の手を包む。

「ユウカから、私の胸に飛び込んできてくれる日を心待ちにしていますよ」  
 優しさだけを湛えた瞳。

まっすぐに私だけを射抜く視線に、心の奥が不思議と温かいものに包まれた。  
 だけどその感情をうまく言い表すことができず、私はただ黙って小さく頷く。  
 すると和馬さんは『よくできました』というように、私の頭を撫でた。

「疲れたでしょう。部屋に戻って、ゆっくり休みなさい」

「あ、は、はい」

彼の手は温かく、私は放すことに名残惜しさを感じたが、言われた通りに車を降りる。扉を閉めようとすると、和馬さんが助手席から身を乗り出して話しかけてきた。「これからは二人で一緒に幸せになりましょうね。では、おやすみなさい」  
 そう言って、彼は幸せそうに微笑む。

「は、はい。おやすみなさい」

ペコツと頭を下げた私を見て、和馬さんはいつそう笑みを深め、静かに去って行った。

## 5 恋人記念日

和馬さんから衝撃以外の何物でもない告白をされてから、今日で一週間。実に濃い一週間だったと思う。

私の心の整理がつくまで待つ、と言ってくれたあと、和馬さんは無理に事を進ませることはなかった。

……だが、連日のスキンシップがかなり激しい。

まず、朝起きると、絶妙のタイミングで電話がかかってくる。

こんなに早い時間に誰だろうと、寝ぼけ眼で電話に出ると、

『おはようございます、愛しいユウカ。一日の始まりに愛するあなたの可愛い声が聞けて、私はとても幸せです』  
 と、告げられる。

和馬さんのあの声で『好きです。愛しています』と連発されれば、恥ずかしさで一氣に目が覚めるといふものだ。今までは寒い朝はなかなかベッドから出られなかったが、この電話のおかげで毎日ベッドを飛び出している。

そしてアワアワしながら出勤の準備をし、会社に到着。

ちなみに和馬さんは私と一緒に出勤したいと言っているのだが、彼と堂々と並んで歩く自信なんて私にはない。

人の視線を惹きつける容姿をしている彼の隣を歩いていけば、必然的に私も見られる。恥ずかしくてたまらない。

こういった私の羞恥心ゆえに一緒に出勤できないのだが、実は他にも理由がある。

社長第一秘書である和馬さんは冗談抜きで忙しく、勤務開始時間前に社長に付き添うことがあるのだ。

だから現状、二人で出勤することは不可能に近い。

「いっそ社長を亡き者にしますか。そうすれば、私の早朝出勤もなくなりますしね」

会社の廊下で和馬さんと話していると、そこをたまたま通りかかった社長が彼のセリフを耳にして、青い顔で叫ぶ。

「だったら、社長秘書を辞めればいいだろう。お前の身勝手な都合で、上司の俺を殺すな！」

社長の言葉はもつともだ。私も人殺しはやめたほうがいいと思う。

そして、会話の最中にやたらと私に触るのもやめたほうがいいと思う。

髪を撫でていた指がスルリと私の首筋を辿ったり、時にはブラウスの襟から覗いている鎖骨の上を滑ったりするのだ。

ある時は正面から抱きしめられ、和馬さんの腕の中で向き合って話をする羽目になったり、またある時は額や頬にチュッとキスされたりもした。

いくらこの会社が社内恋愛を認めていても、これはやりすぎだろう。

「か、か、か、和馬さん！　ここ、会社ですよ！　廊下ですよ！　ほら、あそこで人が見てるじゃないですか！」

連日、顔を合わせるたびに行われる過剰スキンシップに対して、私が真っ赤な顔をして声を荒らげると、

「いくら私がユウカより年上であるとはいえ、まだ頭ははっきりしていますよ。ここが会社の廊下であることは、きちんと認識しています」

と、清々しい笑顔が返ってくる。

「わかってるのなら、今すぐやめてくださいよ！」

腕の中から脱出しようとして、ジタバタと暴れるが、彼の拘束が緩むことはない。

「ユウカのお願いはなんでも聞いて差し上げたいのですが、これは害虫駆除のために必要なことなのです」

真面目な顔でそう言われ、私は大きく首を傾げた。

「は？　害虫？」

「ええ、そうです。自分ではわからないかもしれませんが、ユウカはかなりウチの社員達から愛されています。それが単に可愛い後輩に対する感情であれば許せますが、そうでなければ話は別です」

和馬さんは何を勘違いしているのだろう。この私がモテるはずなのに。

「こんな子供っぽい私と恋愛したい人がいるなんて、冗談としか思えないんですけど？　それこそ和馬さんが私と付き合いたいと言ってきたことが、いまだに不思議なくらいですし」

そう告げると、和馬さんは咎めるような視線を向けてきた。

「私の気持ちは冗談ではないと何度も言っているでしょう。今まで出会ってきた女性の中で、あなたほど感情を揺さ振られた人はいないと」

そう言うって、腕の中の私をギュッと抱き寄せる。  
 「私にとつて、あなた以上に魅力的な女性はいないのです」  
 そんな和馬さんのセリフを聞いて、心臓がキュンツとした。

……が、さつきも言ったようにここは会社の廊下だ。ときめきよりも、他人の目を気にしなければならぬ。

我に返った私の顔から、一気に炎が上がる。

「放して！ 放してっ！ はーなーしーてー！ー！ー！」

「いいえ、放しません。ユウカには私という恋人がいるのだということを、もっともっと社内には知らしめなければ」

和馬さんが大きく上体を屈め、私の左耳に唇を寄せてきた。

「愛してます、ユウカ」

艶っぽい声で囁かれ、クラリと眩暈を感じた瞬間、耳に柔らかいものを感じた。その柔らかいものの正体は和馬さんの唇。

耳の輪郭に沿ってヤワヤワと食み、耳たぶに到達すると、チュウツと吸い付く。そして数回歯を立て、また耳の上部へと向かっていく。

私の耳は、間違いなく真っ赤になっているだろう。

「こんなに赤くなって、まるで熟したリングオか苺のようですね。とても可愛いですよ」

「か、和……馬、さんっ」

彼の声と耳に与えられる刺激で腰が抜けそうになり、目の前のスーツに縋りついた。

どうにか逃れようとするも、手で後頭部を包まれているので、首を振るところか顔を逸らすこともできない。

「お願い……です。や、やめ……て」

体が熱くなるのを感じながら、何度も懇願する。けれど和馬さんはいっこうにやめる気配を見せず、楽しげにクスリと笑う。彼の息が耳にかけられ、背中がゾワリとした。

「あ……」

思わず小さく喘いでしまった。真っ昼間の会社で、なんとという恥態。

今すぐ消えてしまいたい。少しでも自分の姿を隠したくて和馬さんの胸元に顔を埋めた。

すると、和馬さんはますます熱心に唇を這わせてくる。

今度は舌先で耳の輪郭をなぞり始めた。耳の髪一つ一つを、執拗に舐めてくる。

「ふ、ううん……」

体が疼き始め、頭の中に危険を知らせる鐘が鳴り響く。

「か……、和馬さん、放し……て」  
 けれど次に和馬さんは、尖らせた舌先を耳にソツと差し込んだ。耳元でピチャリという音が聞こえる。

「ひ、あっ」

ついに体がビクッと大きく跳ねてしまった。グツタリして広い胸にもたれると、ようやく和馬さんは舌の動きを止めてくれた。そしてコツリと額を合わせる。

「少々やり過ぎたようですね。牽制するどころか、可愛らしく喘ぐあなたを見せてしまい、さらに気が抜けなくなりました。よりいっそう警戒しなくては」

和馬さんは不敵な笑みを浮かべて囁く。

こんな私たちのやり取りを見ていた男性社員たちがガツクリと肩を落として立ち去ってゆくのを、彼のスーツに顔を埋めていた私は知らなかった。

そんなこんなで一週間が過ぎた。

その間、例の指輪は私の左手の薬指から外れることはなかった。

正しく言えば『外すことができなかった』のだが。

なぜなら、ことあるごとに和馬さんにプレッシャーをかけられるからだ。

『指輪は外さないでくださいね。まあ、外されれば、今度はその指に結婚指輪を嵌め

すが』と。

彼氏から贈られた指輪を見るたびに、喜びより恐怖の感情が上回るといえるのは、おかしいと思うが、どうすることもできない。

はあ……と、大きなため息をつくと同時に、お腹がクルクルと鳴った。

気がつけば、すでに時刻は十二時を過ぎていた。

「お昼ご飯、食べようかな」

そう呟いた時、総務部内の女性社員たちがざわつき始めた。

覚えのある状況にゆっくりと振り返ると、案の定、入り口に爽やかな笑みを浮かべた和馬さんが立っていた。

逃げようと思つて席を離れたが、長い足を存分に活かして歩み寄ってきた彼にあつという間に腕を掴まれてしまう。

「な、な、な、なんでしようか?」

すると甘い声が降ってきた。

「今日で私とユウカが付き合い始めて一週間目の記念日ですね」

「え?」

ポカンとしている私。

ニコニコしている和馬さん。

「記念日ですよ?」

彼は一見微笑んでいるように見えるが、実は私にプレッシャーを与えているのだ。

——ここでとぼけたら、絶対マズいことになる!

「そうですね! そうですね!」

私はガクンガクンと首を縦に振った。

和馬さんはさらに微笑む。

「それでは一週間記念ということで、今日はユウカを目一杯愛したいと思います」

「……………は?」

——この人、会社で何を言い出すんだ?

爽やかな笑顔が逆に怖い。

嫌な予感を覚えた私は和馬さんの腕を振り払い、一目散に駆け出した。

そんな私を、彼が楽しそうに追ってくる。

「おや、追いかけてっことをして遊ぶんですか?」

——違うよ! 本気で逃げてんだよ!

こっちは必死なのに、和馬さんとの距離は縮まる一方。

ここで捕まったら、この前の『廊下で耳を舐められちゃった事件』以上の羞恥しゆうぢが待っているに違いない。

私は空腹であることを忘れ、和馬さんから逃げた。

廊下を走り続けていると、和馬さんの声が聞こえなくなってきた。

チラッと振り返ったが、彼の姿は全く見えない。

——よし、まけたか。

そう思った時、前方のエレベーターの扉がゆっくりと開き始めた。

「あれに乗って、完全に逃げ切ろう」

さらにスピードを上げて、私はエレベーターに向かって走った。

……が、完全に扉が開いたエレベーターの中には、両腕を広げて私を迎え入れる体勢を整えた和馬さんの姿が。

「ぎゃあああああつ! 生まれ! 止まるんだ、私!」

しかし、相対的な勢いで走っていたために、結局彼の腕の中に飛び込むことになってしまった。

すかさず私を抱きしめる和馬さん。

「嬉しいです、ユウカから抱きついてくれるなんて。そんなに愛されたいですか? ええ、もちろん、存分に愛してあげますよ」

「ちが、違うつ……………んんっ」

抵抗たげ虚しく、キスをされる私。

覆いかぶさるようにキスをしてくる彼から逃れるすべはなかった。  
 ご機嫌な和馬さんは、執拗なほどに舌を絡めてくる。  
 狭い空間に、クチュクチュと湿った音が響いて、私の頭と心臓は爆発しそうである。  
 エレベーターの中というところで、誰にも見られなかったのが不幸中の幸いだった。

## 6 夏生まれの私。冬生まれの彼。

曆の上では春というものの、陽射しのない日はまだ寒い。冷たい北風が吹きつけられ、  
 耳や鼻先が凍りつくかと思うほどだ。

「なんか、いつにも増して冷えるなあ」

下刷りの社内報を持って、寒さを堪えながら社長室に向かう。

どこからか、風がヒュッと吹き込んだ。

「さ、寒い！」

思わず首を竦める。

私は夏生まれのせいか暑さに強いのだが、その分、寒さにはものすごく弱い。

「うう、寒いよお」

## 立ち読みサンプルはここまで

かじかむ手で社長室をノックする。中に入ると社長室の中は快適な温度に保たれていて、私はふうと安堵の息を吐く。

「ユウカ、どうしました？」

下刷りを受け取った和馬さんが訊ねてきた。

「あ、すみません。廊下が寒かったもので……温かいところに入ったら、ホッとしてしまっ

「無理ありませんよ。今日は、特に寒いようですから」

和馬さんが優しく目を細める。

「ユウカは暑さに強い分、寒さに弱いということでしょうか」

「そうみたいです。生まれた季節に関係するのかも」

「そういうこともあるかもしれません」

「冬場は、指先がすぐに冷たくなるんですよ。今も氷みたいになってしまっ、うまく動きません」

総務部内はエアコンがついているので大丈夫だが、廊下に出ると、すぐに手足が冷えてしまうのだ。

「それは大変ですね」

和馬さんはとても心配そうに声をかけてくる。私は苦笑して首を横に振った。